ヴォアアイランド　第１巻

Vore Island（ヴォアアイランド）と呼ばれる島がある。大海原にポツンと浮かぶこの島は端から端まで最短２０km ほどしかない小さな島である。

赤道付近に位置し、四季はなく一年中が夏。この絶海の孤島には豊かな自然が残されているが、人為的に持ち込まれた肉食獣が何種類も生息していた。イーターと呼ばれるこの捕食者たちのために作られたこの島に定期的に運ばれてくる獲物たちは、自分たちがなぜこの島に連れてこられたのか知らされていない。
もちろん餌として彼らの胃の中に送り込まれる運命など知るよしもない。

▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬

【第１話】

船で運ばれてきた女囚たち３０人。女囚、つまり女性囚人たちである。皆若くまだ１０代とみられる少女らも多く含まれ、最高年齢でも２０代前半。彼女らは囚人服を着ているが、普通の囚人服ではなかった。白黒のストライプは囚人服っぽいが、パンツは履いてない。ショーツがそのままストライプ柄になったようなデザイン。

上半身も腹出し状態の露出度の高いデザインの者たちもいる。ビキニとまではいかないが、なぜか露出度が高い。なぜこのような服を着せられているのか？
それは彼女たちの中には凶悪な犯罪を犯してきた者も多く、衣服に武器を忍び込ませる者たちもいたからである。なのでこのような囚人服となった。

アメリカの刑務所から連れてこられた彼女たち。その多くは白人系であったが、さまざまな人種が混在している。ギラギラした鋭い目つきをしている者も多いが、麻薬中毒のような者はおらず健康的には問題なさそうなバイタリティ

を持った者たちが集められたようにも思える。

攻撃的な印象を与える者も多く人間社会では恐れられる彼女たちであったが、あくまでそれは人間社会のなかの話。この島では、あくまで食肉として求められる存在でしかなかった。

彼女たちを乗せた船は島へ接近。そして小さな川を上流へと向かって進み続ける。川の両サイドはうっそうと茂ったジャングルであった。少し開けた場所に降ろされた３０人の若い女囚たちは、いらだちと不信感が混ざったような鋭い視線で看守たちをにらみつける。

「こんな所に降ろしてどうするつもりだよ！？」
「何なんだよ！？何のつもりだよ！？」

と怒鳴りつけたいのはやまやまだが、看守たちは銃を突きつけているため従うしかない。そもそも自分たちは囚人な

のだから、

「もしかして、ここで死刑にするつもりじゃねーだろうな！？」

なんて思っている者もいた。もはや自分たちに人権などないのだ。いきりたつばかりで感情的な者もいるが、中には注意深く周囲の様子をうかがう者もいた。女囚の１人は周囲の木々の１箇所に違和感を覚えた。

・・・カメラがある？

監視されてるな・・・

そして上空にも何かを見つける。黒い小型の飛行物体。ドローンである。おそらく空からも自分たちを監視している。そしてこの場に女囚たち３０人を残し、何の説明もなく看守たちを乗せた船は去っていってしまった。

取り残された若い女囚たちは困惑した。そしてしばらくその場に留まっていたが、困惑は絶望へと変わっていった。
置き去りにされてしまった・・・
人がいるのかも、食料があるのかも分からない島のジャングルで置き去り。もしかしたら、これは緩やかな死刑なのかも知れない。

実際にそうなのかは分からないが、とにかく生き残る方法を考えねば。まずは飲料水と食料の確保だ。これらがなければ話にならない。もしかしたらジャングルに食べられる植物があるかも知れない。若い女囚たちは１人、また１人とジャングルの茂みの中へと入っていった。

本来なら人数を活かして少しづつ探索範囲を広げていくなどの戦略を立てれれば良かったかも知れないが、彼女らにそういったチームワークはなかった。

ジャングルの茂みへとわけいった１人の金髪美女。身長は高く豊満なバストとヒップ、くびれたウェスト。端正な顔立ちだが目つきは鋭く尖った空気をまとっている。空腹にいらだつ彼女の視界に、突然巨大な植物が飛び込んできた。

高さ４メートルほどの大きな植物で、直径も１メートルほどはあるであろうか。その頂点には赤い花が咲いている、見たこともない植物。

太い幹からは何本もの長い蔦（つた）が伸びていた。これまた長く、５～８メートルほどはありそうな巨大な蔦。下部からはしっかりとした根が広がっている。地下にも伸びているであろう根は地上にも広がっており、そこには無数の果実が成っていた。

地に這い、その果実の香りを嗅ぐ彼女。とても良い匂いがする。見た目はどこか小さなメロンのようにも見えなくもない。その実を１つちぎり、恐る恐るかじってみた。すると、味もメロンのような甘みが感じられた。

ん！？？
食べれるんじゃないか、これ！？？

もう一口かじってみる。美味い。本当にメロンのような味がする。しかもメロンよりも甘い。それだけではない。なぜかムラムラとした性欲が湧いてきた。この実にどんな成分が入っているかは分からないが、なぜか性的な興奮を感じ始めた。

果実の香りに呼び寄せられたのか、２人目３人目と若い女囚たちが集まってきた。そして彼女らも果実を食べ始める。そして３人とも人目をはばからずオナニーを始める。

視界に人が入ってきたことには気づいているはずだが、そんなことお構いなしに３人は自慰行為にふけっていく。この果実の特殊な成分が強力なのか、元々人目など気にしない者たちなのか分からないが、ショーツ（下着？囚人服のパンツ？）を下ろし、自らの股間と乳房をまさぐり続ける。ちなみにブラジャーは元々着けていない。

彼女らの身体からは汗とともに強い体臭が放たれていく。その匂いに強く反応した捕食者がいた。すぐ近くにそびえる巨大な植物である。この植物こそが捕食者（イーター）であった。このイーターの名はモンスタープラント。

自慰行為に夢中になる獲物へと、突然モンスタープラントの蔦が襲いかかる！

何本もの蔦が雌肉の身体に巻きつき捕える。ここにきてようやく、金髪美女は異変に気づく。身体に巻きついた蔦を振りほどこうと暴れるが、硬く強靭でなかなか外れない。意思を持っているかのような蔦はどんどんご馳走の身体へと巻きついていき、動きを封じていく。獲物が暴れるたびに大きくて柔らかい乳房と尻肉がプルンプルンと揺れる。

他の２匹の獲物も金髪美女と同じように長く強靭な蔦に捕えられていた。気づいていなかっただけで、モンスタープラントは近くに何体もいたのだ。茂みの中でカモフラージ

ュされ背景に同化していた。

なお、人数の表記は人間側からは「人」
イーター側からは「匹」と表記する。

▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬

【第２話】

モンスタープラントの蔦は獲物の身体を空中へと持ち上げていく。地面から足が離れた雌肉は、空中でバタバタともがく。もがきながらも食肉植物本体の方へと運ばれていく。

そして彼女の目の前で、食肉植物は巨大な口を開ける。まるでワニのような巨大な口の中には、無数の鋭い歯が並ん

でいた。そのおぞましい姿に絶叫する金髪美女たち。自分が餌として捕らえられたことをようやくここで理解する。絶叫しながら激しく抵抗するも、空中にぶら下がった状態では逃げることは出来ない。

が、イーターとしてもまだ、この暴れる獲物を食べるには元気過ぎるようで、大人しくさせたい。ワニのような口から、舌のような赤い触手を伸ばしていくとその先端を、露わになった雌肉のアナルに一気にぶち込んだ。

「Oh！・・fuck・・n・・no・・・」

汚い言葉がもれる。舌のような赤い触手は、雌肉の尻穴の奥へと潜り込む。そして先端から大量の液体を噴出させる。

「fuck！・・fu・・ah aaa・・oo・・」

汚い言葉ももはや言葉にならない。声を上げながら、直腸の中に大量の液体がぶちまけられたのを感じる金髪美女。

その直後、女は一気に絶頂を迎えた。
電気ショックを受けたかのように、彼女の肉体は一瞬硬直。そして痙攣（けいれん）。この液体はオナニウムという性的興奮剤。獲物を強制的に絶頂状態にして体力を奪っていくのである。

絶頂は収まらず、雌肉のアナルへと挿し込まれた触手からはなおもドクンドクンと興奮剤が流し込まれる。そのたびに女の身体はエクスタシーに突き上げられ、快楽に占領される。もはや彼女は自分の意思で自分の身体を動かせない。

彼女の尻穴からは溢れ出たオナニウム溶液が垂れ流されていく。そして性器からは性液が垂れ流しとなり、失禁し尿も垂れ流されていく。他の２匹の雌肉も同様のありさまであった。

強制的なオーガズムは長時間に及んだ。獲物のアナルへと注がれ続ける興奮剤は、彼女たちの身体をエクスタシーの世界から逃がさない。快楽に占領された獲物の肉体は、も

はや自分の意思で動かすことは出来ない。汗まみれになりながら悶え続け逃げられない状況は、もはや天国なのか地獄なのか分からない。

最初は声を上げていたが、やがてその力も失っていき、ヨダレと鼻水を垂らしながら、瞳も焦点を失っていく。３０分ほどこの状態が続けられ、獲物の身体は消耗し疲れ果て、ぐったりと脱力する。ぐったりとしながらも、なおもわずかに痙攣を続ける。

抵抗する力を完全に失った獲物たちは、もはやただの食肉となっていた。イーターは蔦を使い、器用にこの雌肉から衣服を剥ぎ取っていく。されるがままに裸にされた雌肉のアナルには、まだ舌のような触手が挿し込まれたまま。イーターはその触手を口の中へと戻していく。

それに伴って雌肉も尻を突き出す形で捕食者の口へと運ばれていく。そして獲物の大きな尻肉に喰らいつくと、無数の鋭い歯が柔らかい尻肉に突き刺さる。そして丸裸の雌肉を尻から呑み込んでいく。大きな乳房も呑み込んでいく。その間も雌肉は抵抗する力は残っておらず、されるがまま。放心状態で視点は定まらず、ヨダレと鼻水を垂らしながら、

股間からは尿と性液を垂れ流しながら捕食者の口の中へと消えていった。

ご馳走は胃（？）の中へと運ばれる。それが胃と呼べるものなのかは分からないが、動物の胃のように大量の消化液が分泌され、それにまみれる雌肉。さらに、胃の中にはゴツゴツした無数の臼歯のようなものがあり、食べた獲物を咀嚼（そしゃく）するようにすり潰していく。柔らかい肉だけでなく骨もバキバキに砕き細かくすり潰してしまう。

このイーターの胃の中は口の中でもあると言える。食べた餌の味だけでなく噛み応えを感じ、性感帯でもあるので咀嚼するたび快感がはしる。噛めば噛むほど美味しい味が染み出て、唾液（胃液？）と混ざって口の中で味わい続ける。

また胃であり腸でもあるので、消化されると同時に吸収されていく。消化液は獲物の肉のみならず骨まで溶かし、吸収する。そして雌肉の身体は跡形もなく消えていった。栄養豊富なご馳走を平らげ、満足気なモンスタープラントたち。

モンスタープラントによる食事は茂みの至るところで行われていた。飢えた若き女囚たちは自分たちこそがご馳走であることを知らぬまま、禁断の果実を食べてしまい自慰行為にふけり、捕らえられ食肉加工（強制オーガズム＆全裸に）され喰われていった。

その様子は木々に設置されていたカメラと、上空から監視していたドローンのカメラに捉えられていた。その映像は録画されるとともに、とある秘密の部屋に集った者たちが画面越しに観ていた。

なんとこの捕食シーンはショーでもあったのだ。エンターテイメントショー。捕食シーンを観て性的興奮を覚える世界の大富豪たちが集められた部屋で、それは流されていた。この大富豪たちもまた、みな若い女性ばかりであった。

彼女らは高い金を払ってこの性的エンターテイメントショーを観覧していた。倫理的には許されることのないビジネ

スだが、世界にはこのような闇の側面があるのも事実。大きなマネーは人の命すら買えてしまうのである。

彼女らは若い女囚たちが丸裸にされ、尻からモンスターに丸呑みにされる姿を観ながらオナニーし性的快感を堪能していた。

モンスタープラントの群生地を抜け出すことができたのは１５人。半数の女囚たちが捕らえられ強制オーガズムに打ち上げられ喰われてしまったことになる。

皆バラバラで逃げていたが、危機感からか他の者たちと合流できる者は合流していった。生き残ったのは、どうやら１０代の少女たちだけであった。

人間社会では敵意丸出しで尖っていた彼女たちも、ただの餌として扱われたことに恐怖していた。自分より強そうな大人の女囚たちが簡単に食べられていく様を見せつけられ、発狂しそうであった。

死に物狂いで逃げてきた少女たちは疲弊していた。そして喉が渇いてしまった。少し果実をかじったものの、見知らぬ物をうかつに食べるのも危ういことが分かった。幸いにも川が近くにあったため喉の渇きは潤せるかも知れない。水がバイ菌に汚染されていないか気になるところだが、濾過（ろか）や蒸留する道具などはない。

水にあたってしまっては命取りだが、そうも言ってられない。少女の１人が恐る恐る川の水を飲むと、他の少女たちも飲み始める。暑い気候のせいもあり、少女たちはみな汗だくであった。彼女たちは小川の水に浸かり汗を流していく。そのまま川の中で放尿する少女もいた。

が、その汗や尿が新たな捕食者を呼び寄せていることに彼女たちは気づいていなかった。

▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬

【第３話】

水中にて獲物の匂いを感知したモンスターが静かにご馳走へと近づいてきていた。獲物である少女たちはそれに気づいていない。

女囚たちの中でただ１人、監視されていることを察していた少女。彼女の名前はチエ。日本人である。小柄で童顔な彼女は実年齢よりも幼く見える。ブロンドヘアの白人少女たちに混じって１人だけ日本人の彼女は、人相もおよそ犯罪者に見えない。

パッと見は普通の少女である。が、大きな詐欺事件に関与しており、勘が鋭く危機察知能力が高かった。小川の水に浸かっていたチエはかすかな異変を感じとり、すぐに川から上がる。

次の瞬間、川の水に浸かっていた数人の少女たちの身体が

同時に硬直。一瞬で失神してしまい、脱力し水面に浮かんでしまった。そして川の流れに流されていく。川岸にいた少女たちは何が起こったのか分からずポカンとしている。

数秒してようやく異常事態だと気づいた者たちの中には流される少女たちを救おうと向かう者たちもいた。が、

突然水中から巨大なタコのようなモンスターが現れ、失神した獲物を８本の長く強靭な触手で捕らえた。この怪物もまた捕食者（イーター）であった。このイーターの名はクラーケン。高圧電流を放ち、近くの水中にいる獲物を失神させる能力を持っている。

水中から次々と現れるクラーケンは、失神した雌肉を捕えると衣服を剥ぎ取っていく。そして幅１メートル以上もある大きな口を開ける。口の中には鋭く尖った歯が無数に生えており、丸裸にした雌肉に喰らいつき貪っていく。下半身から、上半身から、尻から、次々と裸の少女を丸呑みにしていくクラーケンたち。

次々と水中から姿を現すクラーケンは川岸の少女たちにも襲いかかる。逃げ遅れた金髪美少女を触手が捕える。触手についた強力な吸盤が吸いつき、衣服を簡単に破り捨てていく。触手の一本は少女の首に巻きつき、喉を締め付けていく。暴れる身体も触手で押さえつけられ、何の抵抗にもなっていない。

息ができず、やがて身体も押さえつけられ胸も圧迫されていく。丸裸にされた少女の大きめの乳房を上から強烈に押さえ込む触手は、獲物の肺を破裂させそうな圧力を加える。

首を絞めている触手の圧力も強力で、少女は白目を剥きながら、口からは舌を出しヨダレが垂れ流されていく。やがて失禁し、股間からは尿も垂れ流しに。

この様子も木々に設置されたカメラと、ドローンのカメラは撮影していた。画面越しにそのシーンを観ていたギャラリーの若い女性客らも興奮し、オナニーを続ける。

クラーケンは白目を剥いた雌肉の失禁した股間に喰らいつ

き、美味そうに呑み込んでいった。その様子を観ながら、ギャラリーの若い女たちも絶頂を迎えていった。

クラーケンの襲撃を受け、さらに半分に数を減らした獲物たちは再びジャングルの中を逃げ回っていた。もはやバラバラに逃げておりそれぞれが孤立していた。

走り疲れて足を止めた茶髪の少女。１年前は街で窃盗や恐喝、ときには強盗すらも行っていた彼女も、もはやただの怯える獲物となっていた。この地ではただの食肉であり、ご馳走でしかなく、それを求める者の胃の中に強引に送り込まれることが運命づけられていた。

少し休んだ彼女は尿意をもよおす。少女は周りを見渡し敵がいないのを確認すると、ショーツを下ろし放尿を始める。無毛の陰部も尻穴も外気にさらされ、雌の匂いがひときわ放たれる。じつはすでにこの雌肉は狙われていた。透明化する能力を持っている彼は、すでに獲物の至近距離まで近

づいていたのだ。

放たれた雌の匂いに食欲と狩猟本能を掻き立てられた捕食者（イーター）。次の瞬間、イーターはもの凄い勢いで少女の尻に喰らい付いた！

「Oh...」

悲鳴ともいえない悲鳴が漏れる。と同時に腰骨が砕かれる音。激痛とともに少女は言葉を失い、空中に浮かびながら尻を突き出した格好で動けなくなる。そして透明だった捕食者は姿を現す。

そこには、体長５メートル、巨大なトカゲのようなモンスターがその大きな口で少女の尻に喰らい付いていた。グリーディリザードである。透明化する能力を持つイーターであり、若い雌の肉が大好物。

少女は何が起こったか理解できず、激痛にもだえ恐怖に震える。一方のグリーディリザードは咥えた獲物の肉体から顎に伝わる噛み応えに狂喜していた。口の中にびっしり生

えた鋭く尖った硬い歯が、少女の柔らかい尻肉に食い込んでいる。

イーターの強靭な顎は、美味そうな雌肉の尻をさらに圧迫する。「バキッ」という音とともに、少女の腰骨はさらに砕けた。

「Ah・・・ahaa・・・」

悲鳴というより、圧迫されたことで漏れ出た小さな声。もう逃げることすらできないであろう獲物の身体から、前足の爪で衣服を破り捨て丸裸にすると、この雌肉を尻から丸呑みにしていく。じょじょに喉の奥へと呑みこまれていく身体は強制的に開脚させられ、大顎が噛み直すたびに大きめの乳房はプルンプルンと揺れる。尻を突き出した形で呑み込まれていくにつれ開脚した両足が身体と並行に、一本の棒状になって喉の奥へとギュ～ッと押し込まれていく。

まだ意識がある少女は恐怖にひきつった顔で涙と鼻水とヨダレを垂れ流しながら嗚咽を繰り返す。途中でその大きな乳房がひっかかるも、グリーディリザードはさらに大きく口を開け、乳房も口の中へと収め、喉の奥、食道へと送り込

む。少女の怯えた顔も口の中へ。そして喉の奥へ隠れると、ゴクンと丸呑みにしてしまった。

胃の中に送り込まれた生きた雌肉は強酸性の胃液にまみれながら、胃の蠕動（ぜんどう）運動で急速に消化されていく。まもなく餌は意識を失い、ことときれる。大きな胸と尻はさぞかし栄養があることだろう。

栄養豊富な餌を平らげ満足げなグリーディリザード。３０分もしないうちに消化吸収され、彼の血肉へと変わっていく。だが体長５メートルもある彼は満腹とは言いがたかった。次の獲物を捕らえんと再びその姿を透明化する。

▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬

【第４話】

茶髪少女がグリーディリザードに尻から丸呑みされていた頃、別の場所では別の少女が捕食者から逃げ回っていた。空を飛べる昆虫型のモンスターに追いかけられていたのである。

このモンスターの名前はビードラゴン（bee dragon）。蜂竜と称されるこの生き物は、体長２メートルの捕食獣（イーター）。見た目はドラゴンのような頭部・コウモリのような翼・鋭い爪の生えた四本の足がありながら、昆虫のハチのような大きな尻尾を持つ。本当に昆虫であれば腹部と呼ぶべきかも知れないが、これは尻尾である。

この尻尾の先には毒針がついており、獲物の口内に挿し込み毒液を大量に注入する。これは神経毒であり、数秒もすると獲物の身体は弛緩しだらりと強制脱力。激しく抵抗していても、すぐに動けなくなり獲物は尿道括約筋も弛緩し小便を垂れ流す。そして動けなくなった獲物の肉を貪り喰うモンスターである。

木々のなかを逃げ回っていた少女だが、ついに捕えられて

しまう。がっしりと押さえつけられ逃げられなくなった少女の口内に毒針を挿し込み、ドクンドクンと神経毒を注ぎ込む。すると１０秒もしないうちに少女は意識を失い、完全に脱力してしまった。

獲物はすでに弛緩し動けなくなっているが、それでも執拗にピストン運動を繰り返す。じつはこの行為はビードラゴンにとってとても快感が伴うのである。なので狩りのための武器でありながら、気持ちいいからやっている。

大量の毒液は獲物の胃の中と肺の中にも溢れ、ゴポゴポと口の外へと溢れ流れ出ていく。それでも彼は欲望のままにピストン運動をやめない。獲物は鼻の穴からも毒液が溢れ出し、目は半開きで白目を剥き出した。

この毒は神経毒。獲物の筋肉は弛緩し脱力する。しかし生命維持に関わる部分には悪影響はない。それどころか、何も食べなくても健康状態が維持され何ヶ月も衰弱することはない。さらには免疫力も向上し、病にもかからなくなる。

じつはこの神経毒は獲物の身体を保存食にするために完成

された毒液でもあるのだ。いつでも新鮮な雌肉が食べれるようになっている。しかしさすがに窒息させてしまっては獲物は死んでしまうので、保存食にするつもりはなくすぐに食べるつもりのようである。

ビードラゴンは鋭い爪のついた前足で、獲物の身体から衣服を剥ぎ取っていく。ショーツを破り捨てると、雌肉の陰部からはまだ尿が出続けており垂れ流しになっていた。

そして裸になった雌肉の尻に喰らいつく。柔らかい尻肉に無数の鋭い歯が突き刺さり、喰いちぎる。臀部はたっぷりと脂が乗っており、喰いちぎった尻肉を美味そうに呑み込む。そして貪るようにそれを繰り返し、どんどん胃の中に送り込んでいく。

脂肪の層の奥には大臀筋があったが、弛緩しているので程良い噛みごたえがありつつも柔らかかった。これでタンパク質が摂取できる。肛門の筋肉である肛門括約筋を喰いちぎると、とても引き締まっていた。そのまま直腸を引っ張り出そうとするも、大あごは恥骨にぶつかり邪魔される。

肛門より奥にある肉を喰うには腰の骨を先に砕く必要がある。喰らいつくとさすがに骨は硬い。が、この噛みごたえも心地良くあごの筋肉に快感がはしる。

バキバキッ！という音とともに少女の恥骨は砕け、それまでも呑み込んでいく。
そして直腸を引っ張り出し喰いちぎり呑み込み、子宮も喰いちぎり呑み込んでいった。

美味い。本当に美味いご馳走にイーターは狂喜しながら食事を続ける。膀胱に喰らいつくと、中に残っていた尿がぶちまけられ、噛みちぎり呑み込む。少女の腰の中はずいぶんと肉を失い空洞が露出する。

次に内側のもも肉にかぶりつき、喰いちぎり呑み込んでいく。ボリュームのあるもも肉もまた、たくさんの脂肪だけでなく、その内側に筋肉がついておりタンパク質も豊富。

太ももの肉もなくなってくると、骨が露出してくる。その付け根に喰らいつき、思いっきり引っ張ると片足が腰から外れた。そして咥えた片足をバキバキと音を立てながら、

ゆっくり呑み込んでいく。

もう片方の足も付け根から喰いちぎり、美味そうにゆっくり呑み込んでいった。本当に美味かった。ほんの数分で獲物の下半身を喰い尽くしてしまったビードラゴンは、今度は獲物の大きな乳房に喰らいつく。脂肪なので当然柔らかく、大きいのでプニュッと口からはみ出る。あごに力を入れると、弾力のある乳肉は簡単にちぎれた。

汗ばんだ乳房を貪るように食していく。そして内臓も喰い尽くし、腕も肋骨も脊椎もバリバリと砕きながら呑み込んでいった。そして最後に大きく口を開け、白目を剥いた少女の顔・頭部を呑み込んでいった。それら獲物の骨肉が喉を通るたび、心地良い感覚が捕食者を包んだ。

お腹いっぱいだった。体長２メートルの彼からしたら、獲物１匹の身体は満足できる量である。腹を満たした捕食者ではあったが、まだ狩猟本能は駆り立てられたままであった。次の獲物を求め、飛び立っていく。次の獲物を捕らえたら、おそらくは保存食にして巣へと持ち帰るのだろう。

この様子を画面越しに観ていた女性客たちは、この日数回目の絶頂を迎えて放心状態であった。心地良い疲労感が爽快であった。高い金を払って来たかいがあった。

部屋のドアが開き、この会の運営側であろう若い女性が現れ、今回のショーはここまでであると告げられた。客はみな満足していた。次の機会も絶対に行くだろう。それ以前に今回撮影した映像は販売してくれないであろうか？

という客の要望（欲望）もすでに想定済みであったのか、「お客さまには今回録画した映像の購入権があります」と告げられる。もちろん凄まじく高額なのだが、客は全員迷いなく購入していった。